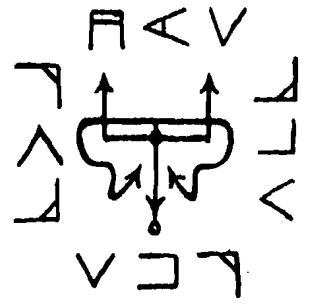




真ク・リトル・リトル神話大系 9

Dark Things

智史郎編
書刊行会

那智史郎

ダゴン秘密教団日本支部福岡教区長。

怪奇幻想文学研究会「黒魔団」同人。

ラヴクラフト、ダーレスをはじめとするアーカム＝ウィアード系の作家の研究につとめる。

74年 ダーレス研究誌「ク・リトル・リトルの枢」をガリ版により刊行。

76年 「ク・リトル・リトル神話集」(国書刊行会)で「インスマスの追跡」「イグの呪い」を翻訳。

79年 黒魔団会誌「CRYPT HORROR TALES」第15号「怪物小説編」編集発行。

82年 「真ク・リトル・リトル神話大系」第1巻で「爬虫類館の相続人」「妖魔の爪」を翻訳。

83年 「真ク・リトル・リトル神話大系」第3巻—第5巻を編纂。現在に至る。

真ク・リトル・リトル神話大系

第9巻

昭和58年11月25日印刷

昭和58年11月30日第1刷発行

2,900円——定価

セイユウ写真印刷株式会社——印刷

大日本製本株式会社——製本

著者——H・P・ラヴクラフト他

編集——那智史郎

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨3-5-18 郵便番号170

電話 03-917-8287 振替東京5-65209

落丁本・乱丁本はおとりかえます

目次

Contents

盗まれた眼	ブライアン・ラムレイ……………7
続・深海の罠	ブライアン・ラムレイ……………49
墳墓の主	リン・カーター……………61
シャツガイ	リン・カーター……………79
黒の詩人	R・E・ハワード & A・ダーレス……………89
インスマスの彫像	H・P・ラヴクラフト & A・ダーレス……………119
妖虫	ラムゼイ・キャンベル……………137
異次元通信機	ラムゼイ・キャンベル……………171
窖(あな)	レイ・ジョーンズ……………191
奈落より吹く風	オーガスト・ダーレス……………211

<i>Rising With Surtsey by Brian Lumley.....</i>	7
<i>Deep-Sea Conch by Brian Lumley.....</i>	49
<i>The Dweller In the Tomb by Lin Carter.....</i>	61
<i>Shaggai by Lin Carter.....</i>	79
<i>The House In the Oaks by R.E.Howard & A.Derleth.....</i>	89
<i>Innsmouth Clay by H.P.Lovecraft & A.Derleth.....</i>	119
<i>The Insects From Shaggai by Ramsey Campbell.....</i>	137
<i>The Plain of the Sound by Ramsey Campbell.....</i>	171
<i>The Well by Ray Jones.....</i>	191
<i>The Thing that Walked On the Wind by A.Derleth.....</i>	211
<i>Arkham House and the Cthulhu Mythos by Shiro Nachi.....</i>	231

本文イラストレーション——

檜

喜八

角 慎作

権 泰年

ブックデザイン——神田昭夫

~~SECRET~~
A M H

日本語版翻訳権独占

国書刊行会

©1983 Kokusho-Kankohkai

Dark Things

edited by

A. Derleth

Copyright © 1971 by

Arkham House Publishers, Inc.

First published 1983 in Japan by

Kokusho-Kankohkai

Japanese translation rights arranged

with Arkham House Publishers, Inc.

through The English Agency (Japan) Ltd.

盗まれた眼

Rising with Surtsey

ブライアン・ラムレイ

那智史郎

訳



七千万年前に絶滅したと考えられていたシーラカンスの発見により、我々は水棲動物の地質年代的分布についての見方を新たにしなければならない……

リンケージ「深海の驚異」

姓——ホートリー

クリスチャン・ネーム——フィリップ

生年月日——一九二七年十二月二日

年令——三十五歳

出身——ヨークシャー州オールド・ベルドリー

住所——不定

職業——著述業

陳述書

私は尋常な扱いを受けたいと要求したが、精神状態から見ても、その必要はないと言われた……その言葉の意味するところは明らかであり、それゆえに私は次の話をせんとするものである。

まず断わっておきたいが、私は超自然現象の狂信者ではない。妄想や幻覚におそわれたこともなければ、神経を病んだこともないし、いかなる種類の精神病にも悩まされたことはない。先祖に狂人がいたという記録もない。スチュワート博士が精神異常であると断定したのはまったくの間違いである。

本陳述書の閲読を認める前に、この点を明確にしておかなければならない。さもないと読者は私が忌むしい大うそつきか完全に気が狂っているに相違ないと考えるであろう。スチュアート博士の見解が支持されることだけは御免蒙りたい……

一九六三年十一月十五日の真夜中すぎ、弟の肉体が私の手にかかって死んだことは認めよう。しかしながら私は殺人者ではない。断固として自分の無実を証明するために、多少長くはなるかもしれないが、この陳述書に私が体験したすべてのことを記すつもりである。なぜなら、本当に罪を犯していないからだ。弟の肉体に宿る生命を断った行為は、健全なる世界に対する恐るべき脅威を知った者の反射的な行動に他ならない。迫り来る恐怖を訴え、また自分の汚名をはらすために、私はここに事の一部始終を詳細に書きとめておく。可能な限り事実を正しく伝え、細心の注意をもって書き上げなければならない。いつか私の身の上に恐ろしいことがふりかかってくるかもしれないが……

この話をどこから始めたらいいものか。

さしあたってサー・アメリカ・ウェンディ・スミスの言葉からはじめた方がよいかもしれない。

「ある途方もない伝説によれば、人類が出現する数百万年前に外宇宙から来た生物がこの地球に住んでいたが、その生物は人類が進化した現在^{いま}も何処かの暗黒の地に潜んでいるという。彼らは現在もなおこの地球にいますとわたしは信じている」

さきの言葉は、著名な古物蒐集家兼考古学者が、アフリカの奥地に向けて最後の旅行に出発する前に遺したものである。サー・アメリカは、私が八ヶ月前に初めて知った恐怖と同種のそれをほのめかしている。サー・アメリカが暗黒大陸から文明圏へたった一人で狂人さながらになって、まい戻ったことを思い起こし、このことを記しておく。

当時、私の弟のジュリアンは、私とは対照的な性格の持ち主で、根っからの神秘主義者だった。弟は、真偽のほどは定かならぬフレイザーの「金枝篇」^{ゴールデン・ボウ}やマーレイ夫人の「魔術」、あるいはボロボロになった高価なウィアード・テールズだとかアールの「神秘」^{ミステリアス・アンシジョン・ユニバース}大宇宙などを手あたりしだいに読み漁っていた。弟が精神に異常をきたしたのはオカルトの世界に首をつっこみすぎたせいだと思われる。私はそうは考えていない。もっとも、ひところは私も皆と同意見であったのだが……

ジュリアンは身体の方は頑健だったが、性格が弱かった。子供の時分、弟は案にガキ大将になれそうな図体をしていたくせに、腹のすわったところがなかった。作家として大成しなかったのもこの性格の弱さに帰因するものだろう。プロット作りはうまかったが、生きた人間を書けず、作品に性格の弱さが出てしまっていた。私は弟と合作をし、プロットを充実させ、土人形のような登場人物に幾分なりとも生命をふ

きこんでやったものである。私がもの書きになるまでには暮らし向きもよくなり、いくばくかの蓄えもできた。そのお蔭でジュリアンの病気の期間中、ほとんど書けなくとも口を糊することができた。蓄えがなかったら弟は己れの身も養えなかったことだろう。幸いなことに、だが反面悲しいことに、弟は後に私の手から全く離れてしまった。しかし、それは弟の病気の兆候が出た後のことだった……

ジュリアンが実際に神経衰弱に陥ったのは一九六二年の五月だったが、その症状があらわれたのは二月二日のことであった。その日はオカルトには縁がない人でさえ知っているキャンドル・マスの日だった。その夜、弟は、海底の泥土にまみれた巨大な玄武岩の塔を夢見た。奇怪な形をした基部は灰緑色の泥濘に埋もれ、非ユークリッド幾何学的な角度をした欄干がおぼろげに見えたという。

当時私たちは時代ものにとりかかっていて、床に就いたのは明け方近くだったろうか。ジュリアンの悲鳴で目をさますと、弟は私に夢で見たことをヒステリックな調子で語って聞かせた。弟は、一枚岩のぬるぬるした城壁の向こうに潜んでいるもののことを口走った。弟の興奮が静まった後で私はつくづく思ったものだ。自らロマンスを書くと同時に、怪奇なる世界に耽溺してしまっている、何て変った男なのだろうと。ジュリアンを落ち着かせることは容易ではなく、その夜、弟はいつかな眠ろうとはせずに家中の明かりをつけて書斎でタイプを打ち続けていた。

弟は恐ろしい悪夢に懲りて毎夜のあやしげな書物の耽読を断念するだろうと思われた。だが、その悪夢は逆の影響を及ぼし、弟の研究をある定まった方向にしむけたのだった。弟は海洋の怪奇に関するものには何でも病的な興味を示し、ドイツ人の書いた「深海祭祀書」^{シタール・カル}や、ガストン・ル・フェの「深海の住人」^{ドゥアラ・スエイ}、ガントリーの「水棲動物」^{ハイドロフィス}、名もない著者の手になる「水神クタート」^{タタート・ファネイシ}などを蒐めては貪り読んで

いた。しかしながら、弟が最も興味をもっていたのはある種の小説だ。弟はそのコレクションから、ク・リトル・リトル神話の知識を大部分会得していたが、それが単なる神話ではないことを熱心に私に訴えたものだった。また弟はしばしば、自分の持っているフィリーの注釈書が実際に役に立たないので、狂えるアラブ人アブドゥル・アルハザードの書いた「死霊秘法」の原典を読みたいともらしていたものである。

次の三ヵ月、我々の仕事は暗礁にのりあげてしまった。原稿の締切に間に合わず、出版者が個人的な友人でなかったら、我々の生計も危うくなっていたかもしれない。ジュリアンが書く意欲を失くしたのがすべて原因であった。弟は読書に時間をとられてしまつてプロットづくりの打ち合せもしようとしくなつた。そればかりではない。弟の悪夢は頻繁になり、より生々しくなつてきた。夜ごと弟は暗鬱な書物に描かれているような恐るべき海底の光景を見てうなされた。弟は病氣になつたのだろうか？ 私には判断がつかねていた。日がたつにつれ、弟は昼間は落ち着かず神経質になつていた。その一方で夜空を、寝に就くのを待ちわびるのである。彼は床に入り忌むらしい悪夢を見て恐怖の寝汗をビッシヨリかくのだった……

我々はグラスゴーで適当な借家を見つけた。寝室は別々で書斎はひとつの家だった。弟はいまや夢を見ることを待ち望むようになっていた。けれども、その夢は悍おぞましくなるばかりで、五月の半ばの二晩か三晩はとくにひどくうなされたものだった。

弟は「水神クタート」クタート・アクアディンゲンのなかの一節に興味を示し、そこに傍線を引いていた。

起て！

名状し難きものどもよ

汝の時機に

汝の選民は

汝の呪文と魔力もて

汝の妖夢と魅惑もて

汝の到来を知らん

我らの主、ク・リトル・リトルの騎士、

翠緑の淵にまどろみし

オトゥームの愛のために

汝の快楽^{けき}を求めん……

弟は種々の原典からメモを丹念にとっていたが、とくに影響をうけたと思われるのは、アンドリュ・フエラン、エイベル・キーン、クレイボーン・ボイド、ネイランド・コラム、ホーヴァス・ブレインなど、蒸[・]発[・]したり、謎の死を遂げたとされている少数の作家の、一部削除を命じられた作品であった。

恐怖の出来事が進行し始めたその夜、弟は極度に疲労して床に就いた。三日間ぶつ通しで病的な本を読んでいたせいなのだが、その間弟はほとんど眠ることはなかった。私が注意しようとすれば、「時が近づいているのに眠られようか」「深淵では見なれないものばかりだ……」などと答える有様だった。一体これは何を意味するのだろうか……

弟が寝室に入ったあと、私もベッドに横になる前に一時間ばかり仕事をしたが、書齋を出る前、ふと気